



▲水戸神社内に残る百太郎溝取水口旧樋門

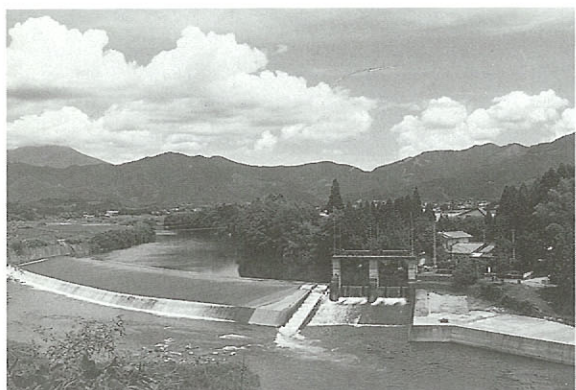
▼改修前の幸野溝



荒野を美田に 変えた水路

●球磨地方：幸野溝、百太郎溝

水に恵まれない土地の農民は哀れだ。米が育ってくれない。痩せ地に粟、大豆、そばなどを作っては、命をつなぐ日々。「このままでは村が危ない。」彼らは水田を引くために、遠く球磨川から水路を掘り始めた――。



▲現在の百太郎溝

▼百太郎溝取水口旧樋門
JR東多良木駅より徒歩15分
水戸神社内

十六世紀末から十八世紀初めにかけて、上球磨地方に二本の水路が作られました。現在の湯の前町馬返で取水し、多良木町、岡原村を通って上村に至る「幸野溝」と、多良木町百太郎で取水し、岡原村、免田町、上村を通って錦町に至る「百太郎溝」です。特に後者は藩の援助も特別な指導者もおらず、文字通り土地の人たちの血と汗で掘り抜かれた水路として有名です。総延長一九キロ。詳しい記録は残っていませんが、完成までに百年以上の歳月が費やされています。

二本の水路は昭和四十三年に改修工事が完了。コンクリート張りの近代的なものに生まれ変わりました。そして、今でも多くの水田を潤し続けているのです。



▶寂心さんの楠

文武の名将が 静かに眠る巨木

●北部町……寂心さんの楠

植木駅から南へ。やがて、目の前に、幹の周りが十三メートルもある巨大な楠が見えてくる。樹齢七七八百年といわれるこの木は、戦国期に生きた一人の男の墓碑でもあった――。

鹿子木親貞(おかし)入道寂心。北部町の鹿子木荘を治め、隈本に古城(現在の県立第一高校一帯)を築いた武将です。文武両道にすぐれ、霊巖洞に逆修碑を残したり、和歌を詠んだりする一方、寺社仏閣の復興にも力を注ぎました。藤崎宮に、後奈良天皇の勅額を頂いたのも、寂心の功績です。彼の墓は、この楠に巻き込まれ、今は根元の窪みにかすかにそれらしいものが見える程度。ゆつたりと枝を広げるこの木に宿り、寂心さんは今でも、やさしく私たちを見守っているのかもしれない。

▼JR鹿兒島本線植木駅下車、車で10分



▶藤崎宮に残る勅額



▲大戸鼻古墳同心円文様

岬の上の 幾何学文様

●松島町……大戸鼻古墳
●大矢野町……長砂連古墳、広畑古墳

山鹿のチブサン古墳に代表されるように、熊本は装飾古墳が多い。全国二七〇基のうち、一一九基までが県内に集まっている。菊池川流域を中心に南下した装飾古墳は、海を越えて天草へも渡った――。

その南限は、円文の大戸鼻古墳(松島町)、直弧文の長砂連古墳、そして刀

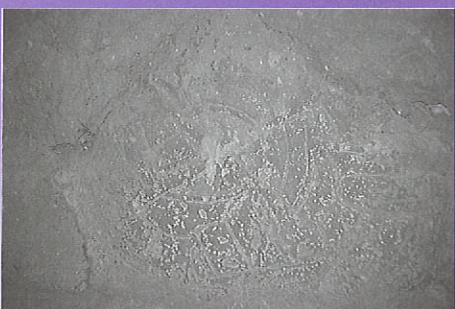


▼大戸鼻古墳



▲長砂連古墳

▲長砂連古墳直弧文様



を線彫りにした広畑古墳(共に大矢野町)です。共に、長い間風雨にさらされ、彩色されてあった朱は落ちてしまいました。面白いことに、これらの古墳のある岬は、ひとつの内海を狭んで三角形を形作っています。なぜ、三角形なのかは、今も謎に包まれています。ここは船の航路で頻りに船が行き来していたところ。生涯海に生き続けた人々は、死後も尚、海にその安らぎを見出したのでしょうか。「海の見える丘には、必ず古墳がある。」土地の人々の言い伝えが耳に鮮やかに蘇ってきます。

▼大戸鼻古墳／松島港から車で10分
長砂連古墳／産交バス満越・熊本線
龍の迫下車徒歩20分

中世肥後きっての 名城

●八代市……古麓城

時は建武の新政。八代荘を賜わった名和氏は、一族の内河義真を下向させることにした。義真は勝れた武将で、麓山に本城を築き、各地の要害に支城を置いて着々と支配の足固めをしていった――。

以来、百五十年間、名和氏の本拠として活躍したが、肥後初の戦闘用山



▼古麓城

城「古麓城」でした。山城に籠って戦闘を続けるという戦法は楠木正成の創意になるもので、当時熊本には約四七〇の山城があったそうです。中でも、この古麓城は強固な名城としてその名を馳せました。相良氏の代になると、城郭は拡張され、巨大な山城を形成したといえます。やがて太平の世がやってきて、中心が平城の八代城に移るようになり、古麓城は人々の記憶から薄れていきました。今では、わずかに土塁などが残っているのみ……。

▼産交バス熊本・八代線宮地下車、徒歩20分